

2022年3月22日

セッション「都市科学マイナス1：都市の原基盤——ジオロジカル・ヒューマンのために」を開きました。

2022年4月から始まるセッション「都市科学0（ゼロ）」に先行して、樽沼範久教授（都市科学部／都市イノベーション研究院）と石川正弘教授（都市科学部／環境情報研究院）がセッション「都市科学マイナス1」を開きました。

樽沼教授は話題提供で、安政の大地震（1855）以後に江戸を中心に流行した鯰絵が私たちの身体感覚に作用する現代的価値や、小松左京のSF小説『日本沈没』（1973）で田所博士が開陳する超長期的地盤変動「気象モデル」や地球史の新局面の仮説の先駆性を經由しつつ、放射性廃棄物の処理場に象徴される現代都市生活の地質的基盤の社会的・政治的・倫理的問題を描き出しました。

ヤーコブ・フォン・ユクスキュル／ゲオルク・クリサート『生物から見た世界』（1934）、クロード・レヴィ＝ストロース『野生の思考』（1962）、畠山直哉『LIME WORKS』（1996）、『Underground』（2000）、高木仁三郎『原発事故はなぜくりかえすのか』（2000）、マイケル・マドセン監督『100,000年後の安全』（2009）、宮崎駿監督『風立ちぬ』（2013）、デイヴィッド・モントゴメリー＋アン・ビクレ『土と内蔵—微生物がつくる世界』（2016）なども接木しながら、時間的にも空間的にも領有できないはずの地球の地質を、人間-社会に内蔵させる「ジオロジカル・ヒューマン」の現実化に向けた思考実験です。

そして石川教授からの応答から、都市で／都市をジオロジカルに考えることの必要性、緊急性を共有したセッションでした。

12:00-05 セッション「都市科学マイナス1」について

12:05-35 話題提供「都市の原基盤：ジオロジカル・ヒューマンのために」

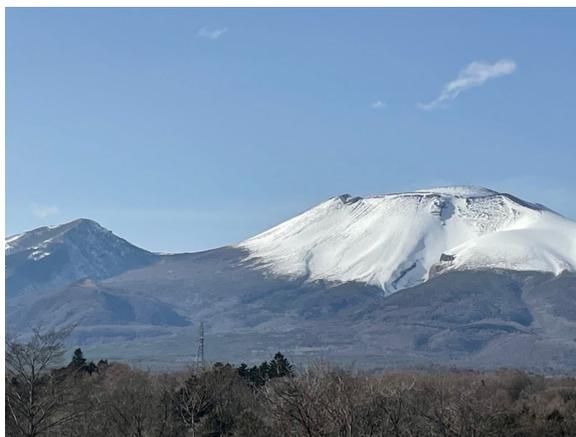
樽沼範久（〔思想・表現の考古学、超都市理論〕都市科学部／都市イノベーション研究院）

12:35-13:00 応答／再応答

石川正弘（〔地質学・地球システム論、南極調査〕都市科学部／環境情報研究院）+樽沼範久

13:00-13:05 休憩

13:05-14:00 都市科学カフェ「都市科学0にむけて：都市とはなんだろう、都市科学とはなんだろう」



高輪ゲートウェイ駅前 2022/03/19（撮影：樽沼範久）；浅間山 2022/03/21（撮影：樽沼範久）